フロロギア（2）

山内　昶

二　日本の風呂

風呂嫌いの西洋人が来日して驚嘆した風習の一つに、日本人の風呂好きがあった。すでにフロイスは『日欧文化比較』（一五八五）で、「日本では男も女も坊主も公衆浴場で、また夜に門口で入浴する」と書いていたし、ケンペルも『江戸参府旅行日記』で、元禄の日本人は「毎日入湯する」と驚いていた。以後幕末から明治にかけて来日した西洋人も、男女混浴の銭湯をみて、日本人は「淫蕩だ」（『ペルリ提督日本遠征記』）といったり、熱い湯に何回も長々と入るのは「健康に悪い」（ポンペ『日本滞在見聞記』）と考えたり、入浴による「清潔は日本文明のなかで数少ない独創の一つ」（チェンバレン『日本事物誌』）と感心したりしている。そこで和風呂史について駆け足で概観し、フロロギアの日欧比較を簡単に行なっておこう。

1　古代の風呂

日本人がいつから風呂に入るようになったのかは、むろん判らない。旧石器時代から河川、湖沼、海泉で沐浴することはあったろうし、何しろ世界有数の火山国のこと、温泉をみつけて湯浴みすることもあったろう。水浴びについては数多くの神話や伝承が残っている（例え

ば羽衣伝説）し、一番古い記録は『魏志倭人伝』にみられた。湯浴みについては『日本書紀』に有馬、伊予、紀、牟婁の温泉の名がみえ、縄文期の湯場遺跡も発見されている。『出雲風土記』には、代替りした国造（くにのみやつこ）が神吉詞（かむよごと）の祝（ほかひ）に朝廷に参向する時、玉造温泉で御沐（みそぎ）した事跡が載っている。老若男女ぞろぞろ歩いて引きもきらず、「まるで市がたったようにみんな入り乱れて酒宴をし楽しんでいる。一度温泉に洗えばたちまち姿も貌もきりりと立派になり、再び浸ればたちまち万病ことごとく消え去り、昔から今にいたるまで効験がないということがない。だから世間では神の湯といっているのである」。太古から日本人にとって温泉はレジャーランド、湯治場、そして霊地だったわけである。

だがこうした自然利用の沐浴ではなく、人為的な設備はどんなものだったろうか。まず語源から始めよう。フロは室（ムロ）からきたというのが、現在のところ定説となっている。ネブリ（眼）がネムリに、ケブリ（煙）がケムリに変ったように、ハ行とマ行とは音韻交代がおこりやすいから、というのが柳田国男説だった。ムロは古代の竪穴式住居や土壁で塗りこめた家の奥の寝所などを意味したが、また自然ないし人工の洞窟などを意味した。つまり人を安全に保護してくれる母胎のような窖を象徴していたのである。

この語源説は、民俗学的事実によって実証される。今日でも西国地方には石風呂が残存しているが、これは海沿いの崖の洞穴などを利用したものだった。シダや木の葉枝を燃やし、灰をかき出したあとに海水を撒き、海藻や濡らした莚を敷いて発汗浴を楽しむスチームバス方式である。一番有名なのは八瀬の窯風呂だろう。これは人工的に作ったムロだが、そこでも塩水を撒いて蒸気をたてていた。沿岸部の古風が内陸部にも伝わったものと思われる。塩俵を下に敷くこともあったようで、その関係から塩風呂とも呼ばれた。『枕草子』に、「塩風呂等に入ると同しく、その所にてたつるやうと聞きしに、小屋あって、其の内に石を多く置き、之を焚きて水を注き湯気を立て、その上に竹の簀を設けてこれに入るよしなり、大方村々にあるなり」とあるのがそれだった。石を熱して湯気をたてる点で先の窯風呂と少し違っている。この形式は三重地方に多く、伊勢風呂と称された。この名称は『甲陽軍鑑』（一五八六）にもでてくるが、喜多村信節（のぶよ）の『嬉遊笑覧』（一八三〇）に、「中には湯なく空風呂にて、湯気のみむして熱きこと堪えがたし」と評され、続けて清少納言の文言が殆んどそのまま引いてある。空（から）風呂ともいったのは湯槽がなかったからである。

熱源こそ違え、いずれも同じ熱気・蒸気浴で、この方式の風呂が、多分日本、とくに西日本の風呂の原型だったと考えられている。各地の温泉の砂風呂（例えば指宿）や蒸湯（例えば別府鉄輪（かんなわ））とも関連があるようだが、とはいえ日本独自の発明ではなかったらしい。という

のもコリア半島には、焼き灰型と焼き石型の二つのタイプが古くからあり、共に汗蒸(ハンジン)と呼ばれていた。これが伝来したのではないかと推定されているからである。では半島が起源かというと、そうではないらしい。さらに中国を経て、シベリアにまで源泉は北上する。

吉田集而をはじめ諸家の研究によると、世界の風呂の発祥地は、バイカル湖周辺らしい。寒冷地の半地下型のムロで、冬に火を焚きすぎた失敗が僥倖に転じたとされている。すると熱気浴が起源ということになるが、左義長の例でも体験するように、燃えさかる焚火に直にあたっているとひどく熱いし咽喉も渇く。飲んだり軀にかけた水がたまたま炉石にかかり水蒸気がたち籠めた。その方が快適だったので、伝播の途中で工夫が凝らされた、という可能性も考えられる。いずれにせよこうした発汗浴は、特定できないが北ユーラシアのどこかで始まった、というのが今のところ有力な見解である。ただ残念乍らこの型の風呂が、現在のシベリアに残っていない。ウラル山脈から黒海周辺にかけてが発祥地ではないかという異説もある。BC五世紀頃スキタイ人がテントの中に真赤に焼いた石をもちこんで、大麻や水をふりかけていた、というヘロドトスの記録を根拠としている。しかしバイカル湖付近では約三万五千年前の旧石器が発見されているから、こちらの方が古い。人類多元発生説を主張するロシアのモチャノフなどは、バイカル山地から流れだすレナ河畔で発掘された石器に基づいて、約三百万年前からシベリアに人が住んでいたと断言している。真偽のほどは定かではないが、もし北ユーラシアのどこかが源泉だとすれば、風呂はモンゴロイドの偉大な発明となり、そこからユーラシアを西へ、ロシアのバニアを経て北欧のサウナとなり、東へ、ベーリング海峡を渡ってイヌイットや北米先住民を経てメキシコのテメスカルにまで拡散した。そして南下して中国、コリアを通って日本にまで達したことになるだろう。

しかしこの型の風呂には色々欠点があった。まず狭くて一度に多人数が入れない。八瀬の窯風呂は高さ・直径ともに二メートルほどである。海辺の洞穴ではもっと広いのもあったが、入口に菰(こも)を垂らしておいても冷めやすい。多数が入るとなると、何度も焚き直さねばならなかった。さらに火照った軀の汗を冷水で流さねばならない。浜辺なら目の前の海にとびこめばよかったが、内陸では川がないと冷水を準備しておかねばならない。じじつサウナやバニア、あるいはアラスカのカシムでものぼせる直前まで入ったあと、外へとび出して雪の中を転げ回ったり、氷のはった川にとびこんでいた。テメスカルでは水やぬるま湯を中にもちこんでいた例もあるが。

従って常に蒸気をたて、冷水ないし微温湯を予め準備しておく設備を作れば、以上の欠点をなくすことができるだろう。飛鳥・奈良朝に

なると、畿内をはじめあちこちに建立された寺院の浴堂にこうした設備がしだいに整備されてくる。例えば光明皇后の千人風呂で名高い法華寺の浴堂は『東大寺縁起絵』（室町時代）をみると、浴場外の大きなかまどで火を焚き、その湯気が浴室の簀子張りの間から出てくる仕組みになっており、沐槽らしきものも描かれている。法隆寺の温室は取り湯式だったようだが、大安寺には三つの温室があって、大きな浴槽を据えた入浴用、湯ないし水をかぶる掛け湯用、そして直火型の発汗用と、用途に応じて使いわけられていた。これは唐の西明寺を模したとされている。東大寺の大湯屋には鉄湯船と呼ばれる大釜があるが、その使用法については諸説あってまだ結論がでていない。高野山金剛峯寺の大湯釜は、屋外の釜との間に木の樋をつけ、浴槽に送っていた。直接熱湯が肌にふれないように途中で溜めがあったから、これは温湯浴だろう。いずれも後世に何度か改修、改築が行なわれていて原形は不明だが、この頃から浴槽に身を沈める方式も普及し始めたわけである。

当時の寺院では浴堂が七堂伽藍に必須の付属建築とされていたが、もともとこれはインドで仏像を洗い浄めるための設備だった（『仏説浴像功徳経』）。そこから垢穢（こうあい）を去って身を清めることは心の穢れを払い、煩悩を洗い流すことだという考え（『無量義経』）が生まれた。さらに『仏説温室洗浴衆僧経』――八世紀には伝来していたとされ『温室経』と略称された――では、沐浴すると「七病を除き七福報を得る」と説かれていた。この温室が蒸気風呂なのか湯風呂なのか不明だが、両方ともインドにはあったらしい。『教識律儀簡釈』によると「温室卽ち是浴室、火閣（かこう）に非ざる也」と釈義されていたのだから。

一方中国でも魏普時代から温湯浴があったことは『世説新語』等にも明らかで、光明子とほぼ同時代の楊貴妃が華清宮の温泉を愛好していたことは有名である。従ってホットバス方式が日本で広がったのは仏教の影響かと思われるが、抵抗感なく受け容れたのは、むろん古代からの水浴び、湯浴みの習慣があったせいだろう。

その後の入浴風景を絵巻物でみておくと、蒸風呂形式のものは『一遍上人絵伝』（一二九九）、本願寺第三世覚如上人の一代記、『慕帰絵詞（ぼきえことば）』（一三五一頃）、『薬師寺縁起』などがあり、浴槽形式では『今昔物語』にもある『是害坊絵巻』（一三〇八）、富山県本法寺の『海中出現法華経絵伝』（一三二七）などがある。両方式がずっと並存していたのであり、時には併設された施設もあった。

最後にあげた『法華経絵伝』では湯浴みする人が皆褌をつけているが、これは光明皇后の立願（りゅうがん）風呂の絵でも同じだった。『温室経』にも入

浴に必要な七物のうちの一つに内衣（うちぎ）があげてあるが、古代の寺湯では必ず明衣（あかは）を着て入る定めとなっていた。この明衣は、天皇の場合天羽衣などと大層な名前がついていた（『西宮記』）が、湯帷子（ゆかたびら）（『和名抄』）ともいい、のちに略して浴衣と呼んだ。平安末期から鎌倉期になると、男は湯褌を、女は湯もじ（湯巻き）をして入るようになり、この習慣は江戸中期まで続く。だから西洋人を面喰らわせた裸の入浴風景は比較的輓近の事だったのである。この間の経緯を『洗湯手引草』（一八五一）は次のように述べている。「慶安の頃迄は、男女共に洗湯え行に、別に褌を持来りて、是をしめかへて湯に入る。上る時は底浅き下盥にて洗ひ清（すま）し持かへる。是を湯もじといふ。其後、手拭にて前を隠し、湯に入し事に成しが、下盥は天保の初迄殘り有しが、不浄といふて、近頃は一向になし。」

湯巻きはもともと貴人の入浴に奉仕する女官が衣服の濡れるのを防ぐため上から腰にまいた裳のことで、皇子に産湯をつかわせる女房たちがこれを巻いて甲斐甲斐しく働く情景が『紫式部日記』や『栄華物語』に描かれている。当時宮中の御湯殿では、別の釜殿で湧かした湯を手桶で汲んで運び、浴槽にいれ水でうめて湯加減を調整する取り湯方式だった。天皇も毎朝この方式で湯浴みする仕来りが平安期にはでき上っていたらしい。現代のＯＬの朝シャンの先駆といえようか。

とはいえ古代では、自家風呂に入る贅沢など下々にとっては高嶺の花だった。『続日本記』によると、天平時代の僧尼は浴堂があったのに月二、三回「清浄沐浴」していたにすぎない。平安期の日記類をみても、摂関といわれた上流公家でさえ、せいぜい月に四、五回程度だった。もっとも朝廷の儀式に参列するため潔斎の意味で申し訳的に行水（かかり湯）はよくしていたが。当然、飢餓に苦しみ重税に泣く一般庶民は、温泉や塩風呂のある村々は別にして風呂を楽しむことなどめったにできなかった。清潔さは経済力に比例していたわけである。そこで寺院では仏陀の慈悲を広く及ぼし、ひいては仏教を弘めるため、しばしば浴堂を開いて民衆や病人に施浴を行なった。供養風呂とか功徳風呂とかいわれたこの一種の福祉事業は平安期以後に盛んになったので、話を中世以降に転じよう。

2　中・近世の風呂

鎌倉時代の武将の施浴として有名なのは、一一九二年に頼朝が行なった、後白河法皇追福のための一日百人、のべ一万人に及ぶ百日施浴。『吾妻鏡』にはまた、北条政子追善のため幕府が長期施浴を行なった記事もみえている。僧侶としては、東大寺再建の大勧進として

活躍した俊乗坊重源が周防の阿弥陀寺に浴堂を建て（一一九七）、鉄釜を作って功徳を施した。東大寺の鉄湯舟を作らせたのもじつは彼であり、醍醐寺、興福寺、善通寺等にも湯釜を寄進し、施浴を奨励した。これが蒸風呂か湯風呂か不明だが、重源はまた東大寺の材木を切りだした周防の佐波川沿いにいくつかの石風呂を作り、杣人や人夫の疲労回復や病気、怪我などの治療にあてている。忍性上人もまた奈良の北山に一八間戸と称する病人の収容所を建て、後に鎌倉の極楽寺を修営して（一二六七）病人や浮浪者に施浴を行なった。これは共にスチームバスだったことが判っている。

室町時代になってもこの種の慈善事業は相変らず続いていた。各地の寺院が日を決めて浴室を開放し、垢摺供養を行なったことは多くの記録に残っている。貴族については、『実隆公記』（一五三七頃）に、足利義政夫人の日野富子が、毎年末に屋敷で両親追善の風呂をたて、湯殿をもたぬ親類縁者や下級公家を招いて入浴させ、食事などを供したことがみえている。同じ供養風呂といっても、衆生済度の公的な慈善事業からしだいに祖先供養へと個人的なものに変ってきたことが窺えるが、さらにもう一つの質的変化があった。室町将軍記ともいえる『花営三代記』には、将軍義政がある年の正月、執事の伊勢守春日邸に御風呂始めに招かれたが、浴後酒肴の宴が催された。後崇光院の『看聞御記』や一五世紀前半の公家の日記などをみると、お互いに風呂に招いたり招かれたりして酒宴を開いたり、時には公卿が市中の風呂屋を借切って――これを留風呂といった――浴後宴会を楽しむことがあったらしい。上流階級だけではなかった。同じ『花営三代記』に尾張国甚目寺村の遺風として、「去年妻を迎へたる家々に、正月十一日湯を設けて、同じ所の人を招き入湯せしめて、浴後杯をすゝむ」とあり、裕福な家では親類縁者だけではなく村中の人々を招いて風呂振舞いをしたらしい。寺院でも夏は毎日、それ以外は五日に一度入浴するようになり、時には浴室で茶の湯が催されることさえあった。入浴が宗教的、公共福祉的なものから享楽的、私的なものへとこの頃変化したことを物語っており、後の湯女風呂への萌芽が現われてきたわけである。だがその原型はすでにあの『出雲風土記』の故事にあったというべきだろう。

こうして中世になると、しだいに入浴の習慣が普及してくるが、個人で風呂をもてる者はむろんごく少数だった。そこで色々工夫が凝らされてくる。その一つが、藤原信実筆とされる『今物語』（一二三九以降）にもその名のみえる板風呂だった。蒸風呂の湯気を外に逃さないように出入口に引戸（これを板といった）をつけたタイプのものである。この典型は秀吉の聚楽第を移築したといわれる西本願寺飛雲閣の

黄鶴台だろう。唐破風の屋根に引戸のついた蒸風呂で、板敷の簀子の間から湯気を送る仕組みになっている。浴室の向かって右には陸湯（上り湯）の釜と水槽が並び、前が洗場になっていた。これ程豪華な設備はむろん太閤のような財力のある人しか持てなかったので、もっと簡略に風呂を楽しむ装置が考案された。熱い湯を膝位まで入れて、引戸を閉め、籠もった蒸気を利用する戸棚風呂がこれである。湯三分、蒸気七分位の半蒸半湯の中間形態で、個人用のものもあったが、後には共同風呂にもなっている。喜多川守貞はその『謾稿』で、戸棚風呂は三都では余りみないが他国の銭湯には往々これがある。「予、兵庫ニテ入シコトアリ。浴槽甚浅ク、湯稍尺バカリ、膝ヲヒタスノミナレバ、引遣戸ヲ用ヒテ、湯気ヲ洩サザラシム」と書いている。一九世紀半ばまで続いていたことが判るだろう。

個人用のタイプは家庭風呂としてあちこちに残っている。民俗資料によると、佐渡のオロゲ（オロケともいった）は、一人用の桶の中に別に沸かした湯を二～三〇センチ入れ、腰かけて上から藁製の大きな笠をかぶせて温まっていた。近江八幡の飛び込み風呂は、土間にかまどを築いて鉄の釜を据え、その上にサナをおいた桶の上から藁で編んだフゴを滑車で上げ下げする仕組になっている。サナとは元来上部が簀子状の床几形の農具で、稲の穂などを打ち落とすためのもの、フゴとは物を運ぶために竹や藁で編んだ籠のことだった。桶の上から飛び込むようにして入るのでその名がついたが、女性や子供には入りにくかったから、滋賀の長浜から湖北、北陸にかけて、樽の側面に扉をつけ、上から蓋をかぶせる麦風呂というのがあった。オロゲは湯を運んできて入れるタイプで移動式、後の二例は下からかまどで熱する固定式で、いずれも湯が少なく蓋をして蒸気浴を主眼とする点を特徴とする。一般にこの形式の風呂を籠風呂と総称するが、恐らくこれが長州風呂の原型だろう。というのも湯と蒸気の比率を逆転させ、籠蓋をとってしまえば忽ち五右衛門風呂に早替りするのだから。

内湯は籠風呂系統でも間にあったが、共浴用には不便だった。一度に沢山入れないし、広い浴室を作って多人数を入れようとすると、絶えず引戸が開閉されて蒸気が逃げてしまうからである。そこで工夫されたのが柘榴口だった。だがその前に銭湯の起源を尋ねておかねばならない。

銭湯がいつ頃から出現したのか、まだよく判っていない。一番古い記録としては『今昔物語』（一〇七七頃）に「東山へ湯あみにとて人を誘ひ」とあり、さらに『永昌記』の天永元（一一一〇）年や『中右記』の大治四（一一二九）年にも洗湯とみられる記事があるらしい。これが寺湯でなく町湯だとすると、平安時代末から銭湯があったことになるだろう。

もっと確度の高い情報としては、諸家の調査によると、『吾妻鏡』の文暦元（一二三四）年に「子の剋右大將軍家法華堂前湯屋失レ火」とあり、さらに『日蓮御書録』の文永三（一二六六）年の四条金吾宛書状に「湯銭」という語がみえている。京都では、八坂神社の『祇園執行日記』の元亨年中（一三二一～二四）に「雲居寺々領有レ銭湯」とある記述が初見らしい。さらに『康富記』の応永八（一四〇一）年に「詣レ高倉風呂」とあり、同二九（一四二二）年の『看聞御記』には「藤井湯辺り、唯一宇焼失、湯屋無爲也」とあるから、室町期には各町毎に地名のついた――他にも五条堀河、一条西洞院の名を冠した風呂屋があった――湯屋ができていたことが判明する。鎌倉時代から銭湯があったのは確実だが、蒸風呂か湯風呂かその構造は判らない。

しかし喜多川守貞は「頼朝公ヨリ、弾左衛門ニ与ヘシ令書ニ、湯屋風呂屋ハ、傾城屋ノ下タルベシ云々」といって、治承中（一一七七～八一）には「既ニ此ニ名アリ」としている。また正徳五（一七一五）年の『京都御役所向大概覚書』では、湯屋と風呂屋が別々に勘定されていた。「洛中湯屋敷数五十八軒、同居風呂数十二軒、風呂屋数十三軒、塩風呂数五軒、同釜風呂数八軒……」と明記されていたからである。最後の塩風呂と釜風呂がその前の風呂屋の外数か内数かは不明であり、八瀬の窯風呂は一六軒あったが洛外に分類されていて、ここでは省略した。湯屋と居（すえ）風呂の合計は七〇軒で極めて比率が高く、すでにこの頃、蒸風呂より湯風呂が多くなっていたことが判るだろう。

居（据）風呂とは、蒸気浴の塩風呂に対し、真水を湧かした温湯浴のことをいった。久松裕之の『近世事物考』（一八四九）に「井水を用ふるを水風呂といへり。行水も是に同じ、今は据風呂など、書けり」とあるのがそれである。音の類似から水（すい）風呂（水（みず）風呂ではない）が据風呂に変ったのだろう。その由来について小瀬甫庵は「永禄已来出来初し事」で「すへ風呂、是は高麗陣有てより也」（新井白石『遺老物語』、一七二二）と明記していた。これは半蒸半湯の前述の籠風呂系統のものではなかったかと推定されている。もっとも戦陣で戦塵を落とすために創案されたのか、すでに国内にあった民俗風呂をヒントにしたのか定かではないが。いずれにしても天正から慶長の頃はスチームバスからホットバスへの移行期であり、その勢力は拮抗していたのである。

そして実は江戸で最初にできた銭湯も蒸風呂だった。三浦淨心の『慶長見聞集』（一六一四）によると、天正九（一五九一）年、伊勢の与市という者が銭瓶（ぜにかめ）橋のほとりに銭湯風呂を作った。「皆人、めづらしき物哉とて入浴びぬ。され共、其比は風呂不鍛錬の人あまた有て、あらあつの湯の雫や、息がつまりて物もいはれず、煙にて目もあかれぬなどと云て、小風呂の口に立ふさがり、ぬる風呂を好みしが、今は町毎

に風呂あり」と当時の情景が活写されている。伊勢風呂に馴れた与市はよかったが、不馴れな連中は辟易したらしい。江戸っ子のいなせな熱湯好きは、ずっと後世の文化文政以降のことだったのである。小風呂という語は、落語の祖とされる策伝の『醒睡笑』（一六二三頃）にもでている。元来は蒸風呂に付属した湯沸装置ないし貯湯装置を指したが、転じて蒸風呂自体をも意味するようになった。

ところが同じ頃、据風呂も共に江戸に現われた。『慶長見聞集』にまた大谷隼人なる者が「すいふろと云物を我たくみ出したりといひて人に見するに、是には徳有とて人毎に学ぶ、今家々に見えたり」と記されている。隼人はこれを関西に売りにいって一儲けしようとしたが、ある老人が水風呂は昔から彼地にある。「其方かみ方へ持行、京堺家毎に有すいふろを見るならば耻て江戸に持帰るべし」と諭したという。この隼人式水（据）風呂が籠風呂系のものだったかどうか、よく判らない。しかし蒸風呂が珍しかった江戸で、これは便利だと急速に普及したというから、湯風呂だった可能性が高い。石川五右衛門が釜煎りの刑に処せられたのは一五九四年だから、かまどの上に平釜をのせたこの形式の風呂はそれ以前から上方にあった筈である。ところが一九世紀初頭まで江戸に五右衛門風呂がなかったことは、十返舎一九の『東海道中膝栗毛』に、弥次郎が小田原の宿でこの型の「風呂の勝手を知らねば」下水（げす）板を蓋と思ってとりのけ、片足をつっこんで火傷をした有名な失敗談から明らかである。じつはすいふろには今一つ別のものがあった。据風炉（Suifuro）と書く茶道具――風呂は風炉からきたとも――で、『日葡辞書』（一六〇三）に、「一方の側に小さな焜炉（こんろ）、他方の側に湯を沸かすための鉄釜のついている銅製の器」とあるのがそれだった。これとよく似た構造に、桶の下腹部に銅パイプをつけて銅壺の入った小桶を釣り、中で炭火を焚いて湯を母桶に送る子持風呂があった。しかし守貞は「文政末比ヨリノ新製也」といっているから、これも除外しなければならない。すると風呂桶の一部を仕切って銅筒を入れ、下に鉄簀を敷いて上から炭火を入れて沸かす鉄砲風呂か、風呂桶の下腹部に燃焼装置をくみこんだへそ風呂のどちらかということになるだろう。半蒸半湯浴の籠風呂から温湯浴の居風呂に変ったものとして守貞は以上の四種をあげ、「京坂、五右エ門風呂を専トシ、鉄砲次ゝ之。江戸ハ、鉄砲風呂ヲ専トシ、其他次ゝ之。然、子持風呂ヲ見ズ」と書いていた。

いずれにせよ和風呂の歴史は、中世から近世への移行期に、スチームバスから半蒸半湯バスを経てホットバスへと変化してきた。というよりむしろ、古来から蒸気浴・温湯浴ともにあったのだが、政治権力が東に移るにつれ、西日本で優勢だった蒸風呂がしだいに衰え、温泉浴からきた東日本の湯風呂が全国を制覇してきた、といった方がよいかもしれない。とはいえ西の横綱が全く敗北してしまったわけではな

い。幕末まで続いた柘榴口付きの銭湯はじつは蒸気浴三分、温湯浴七分の折衷型だったからである。籠風呂から邪魔な蓋をとり除いたのはよかったが、そのままでは湯気が逃げてしまう。そこで破風屋根をつけ三方を羽目板で囲った浴室を設け、板戸のかわりに天井から低く鴨居板を下げて小さな入口をつけたわけである。その方が燃料も節約できた。これを柘榴口とよんだのは、ザクロの実汁を鏡磨きに用いたことから、「屈み入る」を「鏡鋳る（要る）」にかけた洒落だと、山東京伝は『骨董集』（一八一四）でいっている。初期の柘榴口は極めて低く狭く、中は真っ暗で湯気がもうもうとたち籠めていた。人の顔も判らず、時に死人が浮いていても気付かないほどだった。男女入込みだったので、ローマや西洋中世の風呂のように風紀上色々問題があったらしい。松平定信の寛政の改革と水野忠邦の天保の政革で男女混浴が禁止されたが、いずれも三日法度だったようである。鎌倉期には湯屋と風呂屋が分明されていたが、近世に混同されたのもこのせいだった。しかし今でも銭湯に行くことを関東では「湯に行く」といい、関西では「風呂に行く」という。フォッサ・マグナを境にした東西文化の古い差異が、現在でも集合無意識として残存していたわけである。

一方据風呂の中で鉄砲風呂、へそ風呂、子持風呂などのポータブル型は、地方では家々で回して交代で入る回し風呂に用いられたが、都会では辻風呂や担い風呂に転用された。すでに一六八〇年には京の街角に辻風呂が出現（『用捨箱』）していたし、元禄の頃には四条河原で担い風呂を営業していたと『川念仏』は伝えている。また据風呂を舟に載せて港や河川で入浴させる行水船とか船湯とかいう商売もあったことが西鶴の『日本永代蔵』（一六八八）や『和漢船用集』（一七六一）にみえている。これは一章で述べたパリの出前風呂やセーヌ河の浴場船と径庭がない。商売人の発想はいずこも同じだったのである。

風呂についてはまだまだ書くことがあるが、紙幅の都合で湯屋の長談議はこれ位にして、二、三湯の零れ話をしておこう。湯女はすでに『源平盛衰記』（一二四七頃）や『太平記』（一三七一頃）にもみえるが、これはもともと寺院の雑用を司る僧、特に湯をわかす下法師を維那と呼んだことから、浴場主も湯那と呼び、転じて垢摺女にもつけられたらしい。また風呂敷はふつう入湯のとき衣類を包んだり足を拭いたりする布から転じたとされているが、『女礼備忘隨筆』に「男女とも風呂の底に風呂敷をしき申也」とあり、布の一方の乳（小さな輪）を底の釘にひっかけ浮かべて、入浴する貴人の肌が直接浴槽に触れないようにするのが本務だった。さらに料理の風呂吹きは蒸風呂から上った人の肌に息を吹きかけるとぼろぼろ垢がおちる。熱々の大根を吹くさまがそれに似ているからその名がついた、と守貞はいっている。これ

だけいっておいて日欧の風呂文化の比較に移ろう。

三　比較フロロギア

地球は水の惑星だといわれる。BC七～六世紀のターレスも「水（ヒドル）は万物の根元」といったように、水なしでは生命はなく、生物は生きられない。デボン期に海から陸へ上った魚類から両生類、爬虫類といった進化の系統発生を原始の海そのままの子宮の羊水の中で人は誰しも十月十日過ごし、生まれてからもその軀の七割までも原始の海を体内に閉じこめて生きている。たえず一方的に増大するエントロピーの流れの中で一定期間生きてゆけるのも、地表の汚れとしての高エントロピーを水蒸気がくっつけて宇宙空間に放出し、再び低エントロピーの雨となって降り注ぐ水循環の定常流があるからに他ならない。この対流を利用して人間は体内に発生した高エントロピーを汗や小水にくっつけて体外に排出し、生存している。発汗浴に始まる風呂はこの新陳代謝のメカニズムを強制的に促進する装置だったわけである。

環境生態学を知らなかった古代人は、こうした科学的事実を神話的に思考し、象徴的に解釈していた。水には不思議な力が潜み、女性を胎ませたり、植物を育てたり、老人を若返らせ、病いを治すと空想し、河川、湖沼、海泉にはその神秘力の化身である神々や妖精あるいは魔物がすんでいると想像した。しかし水はまた死の象徴でもあった。一切を押し流し溶解する水は、原初のカオスを象徴していたのである。生と死の象徴としての水は、ノアの箱舟で有名な洪水伝説にみられる。これは印欧語族、東洋、オセアニア、アメリカなど世界各地に散在しており、いずれも人類の堕落を怒った神が大水で一掃し、新しい人間を再生させたとされている。もう一つ、北米先住民のイニシエーション儀礼をあげておこう。自ら軀を傷つけて失神した新加入者がまっ暗な穴の中に運びこまれる。むろんこれは子宮のシンボルだった。蒸気浴で蘇生した若者が穴から顔をだすと、全く新しい社会的存在として生まれ変わったと考えられたのである。同様の儀礼は修験道の峰入りにもみられた。

西洋古代でも水の女神や妖精の実在が信じられ、信仰され、その超自然的な力を授かるために水浴びや湯浴みが行なわれていたのに、中世以降なぜ「洗わずじまいで一千年」も過ごしてしまったのだろうか。いうまでもなくそれが異教の習俗だったからに他ならない。キリス

ト教が公認されるや、早くも五世紀の第二回アルル公会議から古来の風俗を禁止、弾圧しはじめ、他方で異教の冬至祭をクリスマスに変えてしまったように旧来の浸礼を洗礼にかえて自家薬籠中の物にしてしまった。バプテスマは元来、男女ともアダムとイヴの生まれたままの姿になって全身を水に浸礼する定めだったが、年に一度の洗礼式にずらりと並ぶ全裸の女信徒をみて動揺する司祭がでてきたので、八世紀のニケア公会議から滴礼に変えられた。しかし四世紀後半の教父クリュソストモスの次の定式にはまだ古代の異教の香が残存していたことを示している。「洗礼は死と埋葬、生と復活とを表している。われわれがちょうど埋葬の時のように、顔を水につける時に古き人は沈み、すっかり埋葬される。われわれが水から出る時、同時に新しき人が現われる」。

神聖な浸礼儀式でさえ聖職者に危険だったのだから、俗人の入浴は一層危険だった。霊ではなく肉の浄化を目的とし、現世の悦楽を追い求めることだったからである。中世を通じて教父たちが霊魂と身体をきびしく峻別し、あらゆる肉体の欲望を禁圧したことは周知の所だろう。とりわけローマ風呂が淫蕩と逸楽の巣窟だったので、教会は悪の温床として風呂を敵視した。浴場で自分の裸体に見とれるナルシシズムは禁止され、八世紀のユスティニアヌス法典では共同浴場へ行った女は夫の方から離婚を言いわたすことができると規定されていた。ボローニュがいうように、「カロリンガ朝の中世は古くからの共同入浴の廃止で幕を開いた」のである。

もっとも、事は洋の東西を問わなかった。江戸でも初期に大いに流行した湯女風呂が風紀紊乱のゆえをもって一六五七年に禁止され、湯女は一掃され、湯屋二百軒ほどがとり潰しの浮目にあっている。これは宗教的理由というより、むしろ政治的理由からだろう。というのも、中・近世は今更いうまでもなく身分的封建社会だった。社会的ヒエラルキーは日常世界では主に衣服によって表示される。服装がステイタスの記号だったわけである。ところが風呂に入るには裸にならねばならず、裸は社会的地位表徴の放棄をいみする。むろん西洋の領主や貴族は大抵城館に内湯をもっていた。風呂を所有するかしないかが、経済的格差に基づく階級差の記号でもあった。しかし中には数奇者がいた。例えばアンリ四世はパリの下町のザメ館とよばれる蒸風呂屋にしばしばお忍びで通っていたし、セヴィニエ侯夫人はヴィシーの温泉がお気に入りだった。だが地位記号を脱いでしまえば、誰しも只の人になる。民話の「裸の王様」のように、王冠をつけていてもその下がまっ裸だと、尊厳も権威も品格もない。水が原初のカオスへの還帰だったとすれば、入浴は封建的秩序を始原の無差別的平等に溶解する危険な所業だった。これは封建君主にとって由々しい問題だった。そこで「風呂屋は社会関係が乱れる、あるいは侵犯される見本として不安の

種になった。社会の枠のなかにおさまりきれない行為を許す場所。風呂屋は社会を安定させるのではなく、動揺させる。防衛するのではなく、堕落させる」（ヴィガレロ）無礼講（オルギア）の空間と目されるようになったのである。

この点は日本も同じである。江戸初期、幕府は武士の銭湯通いを禁止していた。刃傷沙汰があったからだが、そのせいばかりではなかった。日頃威張りかえっている武家も風呂屋では丸腰になり丸裸になって、町人と混浴しなければならない。そこでは士農工商という階級制度は湯水のように流れさってしまったのである。江戸っ子が銭湯を好んだのも、多分そこでは裸一貫で裸の付き合い、話し合いができ、上下貴賤のない自由と平等の世界が開かれていたせいだった。日本語の裸は「肌赤」からきたといい、また「開（はだ）かる」からきたともいわれる。今でも子供を素っ裸にしてやると大喜びで走り回るが、これは生まれたままの自然状態を回復したからであり、社会的な束縛や拘束から脱して、自由が開（はだ）かったからだった。従って福沢諭吉がブルジョア的自由と平等を説明するためにその『私権論』（一八八七）で銭湯を例にとったのも故なしとはしないのである。風呂の湯壷はまた原始民主主義の坩堝（るつぼ）でもあったわけである。

ローマ教会の威光が衰えても西洋人が相変らず風呂嫌いだった理由として、中世末期から近世にかけてペストやシフィリスの流行があったことは一章で述べておいた。病源菌がまだ発見されていなかったこの時代、皮膚を通して病気が侵入すると考えられていたのである。皮膚は自我の砦であり、外界と内界を隔てる薄膜だがそこに無数の穴があいている。風呂に入ると「毛穴が開き、空気中の病毒を一遍に吸いこむことになる」と、ジュイスはその『ペストの予防と治療論』（一六六八）で書いていた。当時は思惟主体と延長客体とを峻別したデカルト哲学の時代だったことを思いだそう。共同風呂に浸ると、何か判らぬ目に見えないモノが肌を通って浸透し、自我境界が溶けだし、自己と他者が混り合い、自己同一性が危険に晒される。それだけではない。風呂に入ると心身が弛緩し、うっとりとした恍惚状態（エクスタシス）に陥る。エクスタシスとはギリシア語で自分の外に出ること、忘我を意味し、理性を眠りこませ失うことだった。そこで男女の浴場が分離されたように共同浴場が閉鎖され、西洋人はまたしても風呂嫌いになってしまった。

これに対し日本では古代のアニミズムが長く生き続けていた。例えば動物が傷を癒しているのをみて温泉を発見したという伝承が多い。そこからシカ（鹿教湯（かげゆ））、クマ（野沢）、サギ（武雄）等の湯と呼ばれているが、人間と動物とが親和的だったことを示している。また神仏や高僧に導かれて発見したという伝説も沢山ある。中には泉源自体を神体として祭っている所（有馬、伊香保、那須）さえあった。

『有馬温泉寺縁起』によると、行基が有馬に向う途中、武庫の山中で行倒れの病人に会った。憐れんだ上人が自分の粮を与えようとしたところ、病人は鮮魚でなければ嫌だという。そこで長州浜までいって魚を求め与えようとすると、まず行基自ら「その気味を試せ」と殺生戒の侵犯を強要した。あまつさえ「湯之効験」の代りに「汝もし聖人ならば、我膚を舐めよ」とまで強請する。瘡を患うその躰は焼け爛れたようで物凄い悪臭がした。慈悲心から舐めてやると突然膚が崩れ、「紫磨金色」の薬師如来となり「我是、温泉之行者也」といって消えたとされている。光明皇后や平安中期の寂照の説話と同工異曲だが、ここに示されているのは、温泉が霊験あらたかな霊場であり、タブーを犯すことで不浄な穢れが清浄な聖に変身するという思想に他ならない。湯は斎酒（ゆき）、斎庭の斎（ゆ）と同根とされ、生命力、霊力を表わしていた。穢れとは気涸れの意で、気が涸渇した状態を指し、湯に浸ることで根元的な生命力である気を回復できたのである。今でも盟神探湯（くかたち）や湯立の神事が行なわれているが、湯の中に超自然的な力が潜んでいるとされるからである。その他禊ぎ、祓い、水行、滝行、水垢離、灌頂、若水などの風習も、単に汗垢を洗い流すだけではなく、中国哲学での宇宙エネルギーとしての気との合一、ウパニシャド哲学でいうアトマンとブラフマンとの統一を意味していた。太古から日本人は山腹にうがたれた母胎としての洞穴に入り、同じく母なる海水の湯気に包まれた風呂の中で、自我の境界が消え失せ、宇宙大にまで無限に自己が膨張する無我の境地を楽しんでいたのである。そこに日欧のフロロギアの根本的な差異があったといえるだろう。

ところが近代になると、西洋の風呂観は一変する。ナポレオン三世の公衆浴場の実験でみたように、垢まみれの不潔な民衆を清潔にし、人的資源の身体管理と社会の秩序管理を合体させることが国家の仕事となった。例えばフランスでは第三共和制以降、学校の寄宿舎、軍隊、刑務所には浴場やシャワーが設置され、週に一、二回の入浴が強制された。浮浪者はまっ裸にされ、ホースで水をぶっかけられたという。国民全体の湯水による浄化作業が始まったわけだが、というのも不潔は悪徳、堕落、無秩序の象徴であり、清潔に飼い馴らされた労働者が毎朝規則正しく工場の門をくぐることが、資本の要請だったからである。当時の労働者の生活がどれほど不潔でふしだらで悲惨だったかは、例えばエンゲルスの『イギリスにおける労働者階級の状態』に詳しい。また普仏戦争の時、火器による死者は三割、残りは病気によるものだった。こうして公衆衛生が緊急の課題となり、軀の汚れを流すことで社会の汚れを排除しようとしたわけである。クセルゴンはいう、「清潔さは、組織的秩序の指標であると同時に、意識の秩序を示す兆候でもあると考えられるようになる。すなわち、清潔で、健康で、高潔な

人間という範疇に対して、不潔で、不健康で、性悪な人間という範疇が対置される。勝利したブルジョアジーの価値観が支配する社会において、清潔さは新しい身体の道徳を象徴するにいたる。というのも清潔さは、労働者階級が責任感を身につけるのに役立つからである」。私的な清潔（propreté privée）はフランス語で私的所有（propriété privée）と同根であったことをつけ加えておこう。清潔で身嗜みのよい私人だけが私有財産をもてたのであり、むろんその中には共同性を奪われた（privé）内風呂が入っていたのはいうまでもない。

明治維新後、西洋の公衆衛生学がこの国にも入ってきたが、元来清潔好きだった日本人は違和感なく受けいれ、せっせと入浴に励んだ。もっとも最初の軽犯罪法ともいえる違式註違（いしきかい）条例（明治五）で、政府は外国人に笑われるという理由から男女混浴を禁止し、裸、肩脱ぎ、腿、脛の露出――人足、職人、漁師などは殆んど褌一つで暮らしていた――を犯罪として取り締まったが。爾来一世紀余り、今や世界に冠たる清潔の国ニッポンが出現している。電車の吊皮やセックスさえ汚いという過敏清潔症候群（ブリック・シンドローム）が蔓延し、抗菌グッズが飛ぶように売れている。一切の細菌を殺戮し一掃した完全無菌室での生活が今や理想であるらしい。だが果たしてこのような過剰不潔恐怖症の彼方に待っているのはどんなユートピアなのだろうか。

（二〇〇一年一〇月一〇日）